

氏名	いちかわまさひろ 市川昌広
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第159号
学位授与の日付	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	サラワク州バコン川流域のイバン村落における生態資源利用に関する研究
論文調査委員	(主査) 教授 山田 勇 教授 立本 成文 教授 古川 久雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、東南アジア熱帯雨林気候下の島嶼部の中心にあるボルネオ島において、人々がいかに熱帯雨林の豊かな資源を利用しつつ、周辺の世界経済的变化に対応して生きてきたかを、実証的に検証した臨地研究をまとめたものである。

調査地はマレーシア、サラワク州北部、州第三の都市であるミリ近郊のイバン族の村落を中心とした地域である。近年、急速な勢いで進んできたサラワクの世界経済的な発展は、当地域の人々の生活に大きな影響を与えてきた。その実態を知るため、伝統的ともいえる生態資源利用がみられながら、近代化の波が押し寄せる、比較的人里に近い場所に調査村を選定した。

この村はサラワク州でもっとも人口の多いイバン族で構成されている。イバン族は、サラワクの大きな河川の中・下流域に多く分布している。同時にその地域は、道路や都市が発達している。調査村も中規模の都市間を結ぶ道路や石油・木材産業の影響を受けてきた。一方で、村やその周辺には原生林や二次林が豊富に残っている。

現地調査は、イバン語とマレーシア語によって行なわれ、村および周辺の地形や農地、村落図はデジタルコンパス等を用いて測量した。定着調査は数度に分けて、合計13ヶ月にわたって行なわれた。村びとの生活全般に関わる項目について、詳細なインタビューと参与観察を行ない、必要に応じて、周辺地域の広域調査も付け加えた。その結果、以下のことが判明した。

ここ100年の当地域の歴史を見ると、ほぼ次の3期に分類できる。第1期は開拓期であり、1900年頃から1950年頃の約50年間である。今から約100年前にこの地域に入植した人々は、土地を開拓した者がその所有者になれるという先取占有の慣習の下、原生林を切り開き、焼畑や湿地田を作っていった。湿地田では倒木や切り株の残る田において、効率的に作業ができる散播が行なわれたことが特徴としてあげられる。当時は林産物が日常的に取引され、特に野生ゴムは国際市場で高値を呼んでいたため、よく採取された。米の不作時には林産物によって生活を維持していた。

第2期は1950年頃から1985年頃で、パラゴムとコメが商品化した時期である。コメを増産するために、湿地田の面積が大幅に広げられた。広い面積の田では、労力を省くため、やはり散播が行なわれ、かつ雑草害を避けるために、田はしばしば移動した。

第3期は1985年頃以降である。この時期は、ミリが木材・石油産業によって発展し、ミリ・ピンツル間を結ぶ道路が整備された。大きな消費地ミリへのアクセスが容易になったことによって、村の様々な生産物が商品化していった。湿地田では、生産の確実性のより高い移植が盛んとなった。パラゴムの生産は行われなくなる一方、コショウ栽培や籐製品の製作が盛んになった。それまで河川を中心に営まれた華人の交易活動が衰退し、交易の中心は道路沿いに移った。村では、道路沿いで多様な生計の立て方の展開がみられた。これらの100年の変化は、航空写真に残された土地利用の変化によみとられ、跡づけることができた。

この土地利用の中で、とりわけ重要なのが湿地田での稲作技術と世帯の生計との関係である。これまでの稲作研究では生

態的環境によって、栽培技術が強く規定されると主張されてきた。しかし、調査村ではむしろ生計の立て方が、植付け技術と強く関係していたのである。例えば、若者が出稼ぎをして高齢者が残る世帯は、小さな田で体力的に楽な散播を行っていた。一方、作業者は働き盛りであるが、労働力が少ない世帯は、小さな田で確実な収穫を上げうる移植を行った。さらに、コメを売るために広い田を作った世帯は、移植と散播の両方を行っていた。このように、湿地田の稲作技術の選択には、各世帯に見られる労働者の数と、労働の質が強く影響していた。

最後に各世帯の生計について、詳細な調査を行なった結果、世帯構成員の個性と年齢、性別、資質、および世帯の中での役割によって、生計を立てるための仕事は選ばれていた。そして、各人が強い担当意識をもって、それぞれの役割を担ってきたことが判明した。新婚家庭では、出稼ぎのみにたよって生計をたてざるをえない状況がある一方、親世代と子供の両方が労働可能な世帯は、出稼ぎに加えて、稲作、籐製品の製作、コショウ栽培、漁撈、木材伐採・製材など、村およびその周辺にある生態資源を利用し、複合的な仕事をおこない生計を立てていた。村びとは一人一人が活発に情報の輪を広げ、新しい仕事を開拓すると共に、それが引き金となって、村全体では、新たな生産活動が次々と展開されてきたことが判明した。

この研究によって、村びとの生活が、開拓期から、現在の生計の立て方が多様化した時期に至るまで、村およびその周辺の生態資源と情報を自分たちの生活に臨機応変に取り入れ、暮らしてきたことが多くの定量的なデータで示された。

論文審査の結果の要旨

本研究の場となる東南アジアのボルネオ島を中心とした地域は、ここ四半世紀の間に大きく変化してきた。先行研究であるフリーマンが調査した1950年代には、イバン族村落のモノグラフを書くことで当時の様相がよみとれたが、現在では、周辺の社会経済的状況が大きく村の生活に作用しているため、歴史的な流れと共に、広域的かつ社会経済的な視野が必要となる。

熱帯雨林気候下のボルネオは、東南アジアの中でもっとも豊かな生態資源をもつ島として知られ、そこに住む人々は、その豊かな資源を軸に生活を営んできた。本論文では、このボルネオ島のマレーシア、サラワク州のイバン族の村落をとりあげ、悉皆調査により各人の経済活動を克明に調べることはじまって、生態資源の内容を参与観察調査し、入植が始まって以来ここ100年の歴史を、周辺の社会経済的背景の中で、ダイナミックに描くことに成功している。

本論文が、これまでの先行研究にない新しい知見をもたらした点は以下に要約できる。

まず第一点は、サラワク北部地域において、入植（1900年頃）後の村落の変化を3時期に分類し、それを航空写真をもとに跡づけた点である。このため筆者は、過去の政府刊行物、インタビュー、地域住民からの聞きとりなどにより、入植後のはじめの50年間を開拓期、つぎの35年をパラゴムとコメの商品化の時期、そして、その後、現在に至るまでの様々な生産物が商品化した時期に分け、それぞれの時期における生態資源の動きについて、詳しく述べている。とりわけ、特記すべきは、焼畑と同時に湿地田の利用が重要であり、これを軸に、コメの生産が増えていったこと、木材伐採が始まり、木材伐出労働者用にコメの需要が伸び出したため湿地田の開拓が急速に伸びていったこと、当初は、河川を利用して行っていた商品の輸送が、道路網の整備により衰退し、河川沿いにあった華人の商業の拠点もさびれて、交易の中心が道路沿いに移り、それと併行して、人々の生計の立て方が多様化したことなど、この地域の動態が詳しく分析されている。この分析によって、この地域の100年にわたる生態環境の変化が実証的にはじめて明らかにされた。

第二点は、生態資源利用の中でとりわけ重要な湿地田稲作を取り上げ、そこでの散播の重要性が指摘されたことである。これまで東南アジアの湿地田稲作の研究は、東南アジア研究センターを中心にした多くの先行研究があるが、散播がこれだけ大きな位置を占める報告は、ここがはじめてである。また、湿地田と共に、村民の日常の生活に現われる生態資源の種類も詳細に記載され、その生計に占める位置が数値に示されることによって、定量的な把握ができていたことも重要である。湿地田の開発は、単に、生態環境の問題でなく、むしろ生計戦略の一方法として、各世帯の人的資源の条件にあった方法として散播や移植が選択されるといった報告は、農学的な稲作方法の解釈を一步深めたものと言える。

第三点は、イバンの人々による生計を立てるための多様な活動をきまこまかく追跡し、定量的なデータを分析することによって、近年の商品多様化の時期におけるさまざまな生活形態の実態を明らかにした点である。彼らの生態資源利用は、稲作からコショウ栽培や籐製品作り、木材生産など多方面に広がると同時に、出稼ぎの場として、木材会社や石油会社で働く

機会も増えた。本論文はこれらの生計を立てるための活動による収入状況を分析し、各世帯の家族構成との関わり合いの上で、個人的な裁量を軸にした、村びと各人の社会経済環境への順応力の高さを報告している。

イバンの人々は、ロングハウスという共同体に属してはいるが、彼らの生活はそれには強く縛られることはなく、各世帯の持つ制約条件の中できわめて自由度の高い生計の立て方をしている。その背景には、ボルネオのもつ、生態資源の豊かさがある。調査村のここ100年間は、村びとがその生態資源の豊かさをよく知り、それを基礎にして、自分たちの生活の枠を広げていった歴史であった。本論文はこの状況を現地語を用いた臨地調査に基づき、克明に分析した。近年の東南アジアの熱帯林地帯にみられる村落共同体とそれを取り巻く厳しい社会生態環境の変容過程を科学的に跡付けることに成功したことは高い学術的意義を持つものと評価できる。

また、本学位論文は地域研究を目指して創設された文化・地域環境学専攻、東南アジア地域研究講座にふさわしい内容を備えたものといえる。さらに、本論文の前提となった諸論文はすでに学術雑誌に2編公表され、国際シンポジウムにおいても二度にわたって報告され高い評価を受けている。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成14年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行なった結果、合格と認めた。